

はしがき

著者	中島 紀恵子
雑誌名	学長特別研究費研究報告書
巻	15
発行年	2004-06
URL	http://hdl.handle.net/10631/601

は し が き

いま、わが国の大学は、戦後の学制以来の大きい大学改革の渦の中で進行しております。しかしながら、いつの時代にも変わる事のない使命を大学は背負っています。

その第1は、教育や学術を継承していく役割です。世界中の看護系大学が諸々の看護科学における知的資産を産出し、保存し、公開しておりますが、わが大学のような小規模の単科大学においても、日本のみならず各国の学術上の資産を体系的に保存し、関係者がいつでも取り出して活用していただける装置を準備していかなければなりません。また、わが大学が、これから将来に向かって獲得し得た学術上の成果を教育活動に関する情報と共に一体的に提供していく役割があります。これは、図書館が充実すればよいというものではなく、教員の教育・研究及び学生や研修生たちの創造的学習に関する諸論文などを後々に継げゆく体制の日常化こそが大切になるでしょう。本報告冊子もこうした成果物の1つです。

第2は、地域に開かれた大学としての「人づくり」です。大学の看護学教育にいま求められている人づくりは、学生と教員の「育てられることと育てること」の関係が、常に円循環している教育プログラムの開発です。それが教育研究に繋がるのです。

第3は、現任看護職の生涯学習のために大学の門戸を広く開放し、支援していくことです。

さて、2002年4月に新潟県立看護大学が開学して以降、わが大学では、「学長特別研究費」の費目を用意し、運用できる仕組みを作ってきました。大きな目的は、ささやかだけれども教員一人ひとりの教育・研究計画において、どうしても知りたいという熱望とその具体計画にこたえられる支援を大学独自のプログラムとしてもつことです。論語に「憤せざれば啓せず、悱せざれば発せず」という言葉があります。とりあえずは教員の、どうしても「知りたい・したい」モノやコトを熱意をもって明らかにするための自主性や個々人のエンパワメントにもとづく研究活動の蓄積が、わが大学の伝統になっていくことを展望してこのプログラムを用意しました。

開学からまだ3年目ですが、大多数の教員がこうした意図に応えられ、ここに、2年目の成果報告書ができましたことに心より感謝いたします。

また、日頃より教育・研究活動に暖かなご支援をいただいた関係機関の皆様や当大学事務局並びに新潟県福祉保健部の方々にお礼を申し上げます。

平成16年5月20日

新潟県立看護大学

学長 中島 紀恵子